

旧約聖書講解シリーズ

エズラ記・ネヘミヤ記・
エステル記

H・A・アイアンサイド

EZRA
NEHEMIAH
ESTHER

BY H.A.IRONSIDE

旧約聖書講解シリーズ

エズラ記・ネヘミヤ記・
エステル記

H・A・アイアンサイド

伝道出版社

**Ezra • Nehemiah
Esther**

by

H. A. IRONSIDE

LOIZEAUX BROTHERS
Neptune, New Jersey, U. S. A.

Publisher
EVANGELICAL PUBLISHERS
Tokyo, Japan

目次

エズラ記

序文

第一章 聖別された器

第二章 御名のある場所に帰る

第三章 神の宮と主の祭壇

第四章 敵対する者たち

第五章 預言者の任務

第六章 神の宮の完成

第七章 二度目の旅立ち

第八章 信仰者たちの行軍

第九章 「雑婚」による墮落

第十章 卑しめられ、再び高くされる

序 文

第一章 訓練された人

第二章 失敗したあかし

第三章 エルサレムの門

第四章 兵士としてのしもべ

第五章 内部紛争

第六章 罾と計略

第七章 秩序の回復

第八章 律法の朗読

第九章 祈りとみことば

第十章 再出発

第十一章 自発的な人々

第十二章 城壁の奉献式

第十三章 墮落に対する警戒

エステル記

序 文

第一章 王宮の大宴会と王妃ワシユテイの追放

第二章 エステルの選択と阻止された反逆

第三章 アマレク人の激怒と運命の宣告

第四章 灰と荒布の中で

第五章 恵みの笏と酒宴と絞首台

第六章 眠れない夜の出来事

第七章 二度目の酒宴とアマレク人の最期

第八章 高く引き上げられたモルデカイと恵みの法令

第九章 (1) 解放 (1—19節)

第九章 (2) プリムの祭りの制定

第十章 平和について



エ
ズ
ラ
記



序文

旧約聖書には非常に密接に関連する書卷が七卷あります。そのうちの三卷は歴史的な書卷、別の三卷は預言的な書卷、残りの一卷は歴史のかつ預言的な書卷と言えるでしょう。すなわち、最初のグループにはエズラ記・ネヘミヤ記・エステル記、第二のグループにはハガイ書・ゼカリヤ書・マラキ書、そして最後の一卷にはダニエル書が相当します。これらの書卷はすべて、ある一つの出来事と大いに関係しています。言うまでもなく、それは、七十年間にわたる捕囚の終焉しゆうえんを始めとする神の特別なみわざのことです。エレミヤの預言どおり、パレスチナの地は失った安息を取り戻そうとしていました（エレミヤ二五・11—14、Ⅱ歴代誌三六・21、ダニエル九・2）。この荒廢の期間、その地の民は最初バビロン王の奴隸となり、バビロン滅亡の後にはペルシャ王に隸属しました。バビロンは偶像礼拝の巢窟そうくつともいふべき国で、人々は悪魔によって扇動され、間違つた礼拝にふけていました。

そこにはあらゆる邪悪な教えが萌芽ほうが状態で存在していたのです。神によって与えられた啓示から

人々の目をそらそうと、悪魔は昔から巧妙な手口を考え出してきたものです。

神はユダヤ民族の中に深く根ざしてしまつた偶像礼拝を取り除こうとされました。「強暴で激しい」(ハバクク一・6) 異教徒のカルデア人に彼らを渡されたのは、まさにこの理由からです。偶像とは邪悪な霊に踊らされた人間の「想像の産物」にすぎません。至るところに偶像が氾濫はんらんした異国の地で、彼らは自分たちの愚かさを十分に学びました。「若いころの連れ合い」(箴言二・17)を見捨てて、この世の憎むべき「多くの神や、多くの主」(Iコリント八・5)を慕つた結果の悲惨さを、彼らはいやというほど思い知らされたのです。退廃した異教の砦とりでともいふべき国での経験を通して、彼らはそれまで見過ごしていた神のことばの重要性を教えられました。彼らは偶像礼拝という「病」からいやされ、神の恵みにより回復されたのです。

しかし不幸にも、後の時代のパリサイ人に代表されるように、聖霊の幸いな働きは、後にその民の間から消滅してしまいます。みことばへの純粋な信仰は、やがて単なる「聖書崇拜」という、ただ知的なだけで心の通わないものに成り下がってしまうのです。みことばに厳格に従つてはいるものの、真に神の意味するところは全く無視されたのです。エズラたち(彼らは後に「大会堂の人々」と呼ばれました)の後継者であるパリサイ人は聖書の研究に非常に熱心でした。彼らは律法に精通し、その中の文字の数まで数えるほど聖書の一字一句をたいへん重んじました。律法の「注解書」が数多く作り出されましたが、その大部分は、知的な面だけに傾いた冷たい極端な内容でし

た。それは神の真のみこころを理解しない「人間の想像の産物」にすぎなかつたのです。しかし、それらの「注解書」が、ある面ではみことばへの本来の敬虔さを物語っていたことも事実でした。やがて旧約聖書全体の中心であり本体であるお方がこの地に来られました。モーセを始めとするすべての預言者が書いた、まさにその本人が来られたにもかかわらず、このお方は、信仰によって理解されることなく、拒絶され十字架にかけられました。しかも、エズラ記において神への熱意を賞賛された「レムナント (remnant)」（「残りの民」の意。バビロンからの帰還者たちを指す）の子孫によつてです。彼らが安息日ごとに公の場で朗読し、個人的にもしばしば学んだ預言の成就として、このお方はベツレヘム・エフラテに誕生されました。このお方は「異邦人のガリラヤ」（マタイ四・15）の光であり、ろばに乗られた謙遜な平和の君でしたが、彼らはこのお方を拒み、このお方の申し出をはねつけました。それによつて彼らは、自分たちの手を通して「もう一つの預言」を成就させてしまったのです。

彼らの「大失敗」の結果、やがて来たるべき日には（今やその日は間違いなく近いのですが）大部分のユダヤ人が以前よりもはなはだしい偶像礼拝に陥ることでしょう。彼らはやがて、未来に出現する反キリストを受け入れ、イスラエルのメシヤ、「先祖たちの知らなかつた神」（ダニエル一・38）の使いとして反キリストを承認することになるのです。神から離れたユダヤ教徒たちも、背教したキリスト教界も、同様にこの「ローマの獣」を「とりでの神」として礼拝します（同36―